

儀礼の「パフォーマンス化」や「娯楽化」にも通じることであるが、それら新たな実践を都合の良い流用として捉えられるのだろうか。むしろ実践者本人らにとって、身体化されたモラルを遵守しつつ自らの願望を適えてきたと捉えるべきではないだろうか。さらに言えば、近年のカフェの文化のようなグローバルな消費文化が矛盾なくイランの社会に広がりを見せている。チャードルを深く被ったムスリマが友人の男女とカフェでカフェ・ラテを飲むことに矛盾はない。もはやイラン研究・イラン社会において重要なテーマであった「伝統」と「近代」という問題は、両者の二分法の止揚へと向かっているのではないだろうか。

「イスラーム的」と考えられる側面とグローバルな消費文化が折り合いを見せながら矛盾なく展開していることは、決してイランに限ったことではなく、イスラーム復興を経た他の中東のムスリム社会にも共通しているのではないだろうか。レバノンのヒズブッラーの影響力の強い地域のカフェを舞台に描かれたディーブとハルブによる民族誌はその一例である [Deeb and Harb 2013]。本書で著者が言わんとしている西洋近代とイスラーム的近代の二分法を止揚したモダニティの模索は、イスラーム主義というレベルだけで起こってきた事態ではなく、イスラーム復興に見られる事態だと考えることができるのではないかと評者は考えている。もちろんグローバル化の進展に対するムスリムの反応は一律ではなく、時にはムスリム内の認識の変化を伴ったイスラーム的近代の模索が一層進むということは、近年のハラール産業やイスラーム金融の展開からも指摘できる [cf. 八木 2013: 39–41]。

イスラーム主義において「あるべき秩序の回復」の方向の一つが、西洋近代とイスラーム的近代の接合へと向かう中で、翻ってわれわれの進むべき道筋の一つも「伝統」と「近代」との二分法の止揚である必要が示されているのかもしれない。もちろん、その方向へと進むと決めることは、ポスト・イスラーム主義の行方が不透明な現状において、時期尚早な判断である。であるからこそ、ポスト・イスラーム主義の行方を、自身を見るように考えていかなければならないのかも知れない。

<参考文献>

- 私市正年 2012 『原理主義の終焉か——ポスト・イスラーム主義論』 (イスラームを知る 11), 山川出版。
 八木久美子 2013 「イスラーム的に消費するということ——ハラール概念の変容とその意味」『総合文化研究』16, pp. 30–43。
 Deeb, Lara and Mona Harb. 2013. *Leisurely Islam: Negotiating Geography and Morality in Shi'ite South Beirut* (Princeton Studies in Muslim Politics), Oxford University Press.
 Yaghmaian, Behzad. 2002. *Social Change in Iran: An Eyewitness Account of Dissent, Defiance, and New Movements for Rights*. New York: State University of New York Press.

(黒田 賢治 国立民族学博物館特任助教)
 人間文化研究機構センター研究員)

阿良田麻里子『食のハラール入門——今日からできるムスリム対応』講談社 2018年 144頁

日本に観光で訪れるムスリムは年々増加傾向にあり、日本国内でも、「ハラール食品」や「ムスリムフレンドリー」といった言葉を耳にすることが多くなった。また、2020年には東京オリンピック・パラリンピックを控えていることから、ムスリムの「おもてなし」への対応がこれから一層高まると予想される。実際に、企業向けハラール・セミナーの開催やハラール・スタディーツアーなどもみられるようになり、ハラールへの関心は日本でも、国際的な高まりを追うかのように高まってきている。加えて、ハラール食品に関する入門書やハラール認証制度に関連する書籍がいくつも刊行されるようになってきた。とはいえ、ハラール食品をビジネスとして扱うことに特化した書籍が多く見受けられ、ハラールに関して非常に不正確な記述のものが多く。

本書はハラールに関する入門書として、類書とは質が違っている。東南アジア、特にインドネシアを文化人類学的に研究し、現地の事情に詳しい著者はさらに、国立民族学博物館、東京工業大学「ぐるなび」食の

未来創成寄附講座において、生活としての食文化、食の選択や消費行動などの研究をおこなってきた。イスラーム圏の地域の事情を尊重する研究視座を背景に持つ本書が、その点で他と一線を画している。

全体は序章、4つの章、付録で構成されている。次に各章の内容を紹介する。

第1章では、まず、ハラールの基本を理解するために、ハラールとハラームの原則についてクルアーンを引用して説明している。また、ハラールの説明を行う上で、ユースフ・カラダーウィーの著作を紹介している。原書はアラビア語であるが、ハラールに関する基本文献として英訳やマレー語訳も刊行されており、マレーシアやインドネシアでも高い人気を誇っているため、現地の視点に沿った説明となっている。

第2章では、ハラール認証制度を説明している。現在、世界各地にハラール認証規格及びガイドラインがいくつも存在している。本書で取り上げられている主な規格及びガイドラインは、マレーシア、インドネシア、タイ、アラブ首長国連邦、湾岸協力会議(GCC)、イスラーム協力機構(OIC)が発行したものである。この他に、日本の認証機関についても述べられている。

本章の中で、規格やガイドラインの世界統一が実現しうるかについても論じられている。現在、世界的にガイドラインの統一化を求める動きが生じているが、本書の著者は、地域の固有性などからマレーシアで売れたものが中東で売れるとも限らないといったビジネスの側面から、規格やガイドラインの統一化への動きに異議を唱えている。次いで、「全てのムスリムに通ずる最小公倍数を求めて……何の意味があるのだろうか」と指摘している。評者も(理由は少し異なるが)統一化の実現性については疑問符を付けており、統一化が困難という点で著者の指摘に首肯できる。

また、ハラールのインバウンドビジネスについて、飲食業に関わる様々な認証と用語をまとめている。比較的よく使用されている用語として本書では、「ハラールレストラン」、「ハラールキッチン」、「ムスリムフレンドリー」の3点が挙げられている。これらの用語は、解釈が定まっておらず、時に誤解が生じる現状があるため、正確に認識しておく必要がある。

第3章では、法学派によるハラールとハラームの見解と個人によるハラール観の違いについて検討している。魚介類は、法学派における見解が異なるものの一つである。本書では、インドネシアにおけるカニの事例を挙げ、カニはハラールか否かの論点を取り上げている。また、家畜のと畜についても議論を行っている。その他に、ハラールに関する情報の取り扱いについて言及している点は大変興味深い。

ITが発達し、誰もが気軽に情報にアクセスできる現代において、情報の選別が必要でありネットリテラシーが重要であることは言うまでもない。ハラールに関しても同様である。本書では、「ハラールとハラームの狭間にある疑わしいものを『シュブハ』と呼び避けるべきとされている」との説明がある。特定の食品がシュブハか否かは、認証団体によっても見解が分かれることがあり、むずかしい問題の一つとなっている。このむずかしさとITによる情報拡散が結びつき、風評被害が起きることもある現実が指摘されている。具体的には、ブタ成分が混入しているか否かといった情報がネットを越え、口コミのみによって拡散してしまったケースが紹介されている。

本章の最後ではアルコール／ハムル(酩酊飲料)について取り上げている。ここでは、アルコール／ハムルについて、6項目に分けて論じている。第1にイスラームにおける飲酒について、第2にハラール認証におけるアルコールの扱い、第3に消毒用アルコールなどの使用について、第4に調味料としてのアルコールの使用について、第5に味噌や醤油、酢などの発酵調味料の使用について、第6に信仰とアルコールについてである。アルコール／ハムルは、ハラールの議論において必ずと言っていいほど取り上げられる内容であり、著者はムスリムの実態を踏まえ、これを論じている。

第4章では、ムスリム観光客の受け入れについて述べられている。中でも、ハラールに従事する状況、図にしてみればわかりやすく示しているのが非常に興味深い。第1に「ハラール先進国のモデル」、第2に「現在、日本のムスリム対応で強調されているポイント」、第3に「ハラール後進国日本の目指すべき戦略」の3つの図が提示されている。著者は、「本章で述べるのが唯一の解決策であるというつもりはない」と前置きしつつ、日常レベルにおけるムスリムへの理解を先駆けとし、徐々にハラールへの対応を充実させていくといった考え方を提示している。つまり、日常生活の中でのちょっとした工夫から、人々のハラールに対する理解を深め、徐々に人々のハラール対応レベルを上げていくという考え方であり、非常に合理的な提案と言える。

食に関する日常生活内のちょっとした工夫に関連し、本章の4節において『フードピクト』を紹介している。この『フードピクト』は、これまでの言語表記のみとは異なり、使用した食材などを、イラスト(ピクトグラム)を用いて表示するのである。これは、食事提供をする側にとっても、選択する側にとっても容易で、言語での対応が困難な場合でも相手に簡単に伝えうる方法である。このような工夫から、ハラールへの理解が深まることも期待したい。また、本章の5節においては、各種「～フリー」表示にも言及しており、「ポークフリーメニュー」、「ミートフリーメニュー」、「ヴェジタリアンメニュー」の3種について述べている。

最後に本書に付随している付録として、付録1「礼拝への対応」、付録2「断食への対応」、付録3「ハラール食材の入手方法と情報サイト」の3つがある。付録1では、礼拝への対応がわかりやすく写真などを用いて丁寧に説明されている。また、お金をかけずにできる礼拝場所の要望への対応についても言及がある。付録2では、断食の具体的な様子と、断食への対応について説明されている。付録3では、ハラールとされる食材を取り扱っている主な店舗やウェブサイトを掲載しており、ハラールな食材を購入したい場合に役立つはずである。この付録には、入門書ならではの親切さが発揮されている。

以上に各章と付録について紹介したが、本書が優れているのは、著者のフィールドワークの事例を交えて、日本でハラールへの対応をどうすべきか、ムスリム側が求める点と日本側のあるべき対応という双方の立場から記している点にある。また、統計データやフィールドワークから得た知見をバランスよく組み合わせ、複雑なハラールの問題について多元的に明らかにしている点が本書の良い点であろう。加えて、本書は著者が重要だと考えている箇所は文字をピンクにするなど、書内での工夫がみられる点も注目に値する。本書は、現在の食のハラールを理解するための非常に意義深い入門書となっている。

地域研究の観点から言えば、本書がインドネシアをはじめとする地域の実態に根差した水準となっていることは大変喜ばしい。その一方で、ハラールの問題は、コスモポリタンな側面を伴っており、ムスリム・ディアスポラやそのコミュニティが果たしてきた役割も大きい。各地域の事例を取り上げた分析に加えて、今後の課題としてコスモポリタンなハラール問題の分析も必要とされる。現在マレーシアをフィールドにハラールについて研究をしている評者は、ハラールの世界的な動向を「グローバル・ハラール・ムーブメント」と規定して分析を進めている。

今後は、このような入門書のみならず、イスラーム圏の事情を踏まえつつ、国際的な視野からハラールを論じる学術的専門書が刊行されていくことを望みたい。

(桐原 翠 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

Zamir Iqbal and Abbas Mirakhor. 2017. *Ethical Dimensions of Islamic Finance: Theory and Practice* (Palgrave Studies in Islamic Banking, Finance, and Economics) 1st ed. Cham: Palgrave Macmillan. xv+192pp.

本書は2007年に起きた金融危機とそれに伴った経済的犯罪、そして資本主義における道徳の荒廃などの問題を提起し、イスラーム経済における道徳や倫理、リスクシェアについて論じた書籍である。

本書の著者はイスラーム開発銀行の財務担当副総裁であるザミール・イクバルと、長年、国際通貨基金に務め、マレーシアにある国際イスラーム金融教育センター(International Centre for Education in Islamic Finance, INCEIF)の草創期に教鞭を執った経験のあるアッバース・ミールアーフルである。両氏はこれまでも共著で *An Introduction to Islamic Finance: Theory and Practice* などのイスラーム金融に関する共著を執筆している。

本書は以下の7章で構成されている。

第1章 倫理と金融